

を通過して右心系に入り、先端が肺動脈まで至る shunt チューブを確認した。以上、V-P shunt チューブが心臓内に迷入した一例を経験したので、文献的考察を加えて報告する。

8) 脊髄腫瘍の MRI 診断

秋野 実・宮町 敬吉  
井須 豊彦・岩崎 喜信 (北大脳神経外科)  
阿部 弘  
阿部 悟・宮坂 和男 (北大放射線科)  
野村三起夫・斎藤 久寿 (札幌麻生脳神経外科)

我々は過去2年間に脊椎脊髄疾患2,000例のMRI診断の経験を有しているが、このうち当科で治療を行った40例の脊髄腫瘍のMRI診断について検討した。

〔方法・対象〕使用装置は0.15T常電導タイプである。症例は、髄内腫瘍16例(astrocytoma 7, ependymoma 5, hemangioblastoma 4)、髄外腫瘍15例(meningioma 5, neurinoma 10)、転移性腫瘍7例、椎体腫瘍2例である。パルス系列は、T1強調像(TR 500, TE 30~40ms; SE, IR), T2強調像(TR 2000, TE 60~90ms; SE)を採用している。撮影原則は① surface-coilの使用②矢状断横断像両者での検討を必須としている。16例でGd-DTPAを使用した。

〔結果〕①一般に脊髄形態の検討から髄内腫瘍と髄外腫瘍との識別は容易であった。②髄内腫瘍の診断では、astrocytomaは境界が不鮮明でcystの合併頻度は低率であり、ependymoma, hemangioblastomaでは比較的境界が鮮明で9例中8例と高率にcystの合併が見られた。③Gd-DTPAにより腫瘍部は明瞭に描出され、cyst部はエンハンスされない事から、両者の識別が可能であった。

〔結語〕MRIは、非侵襲的に直接、脊髄、腫瘍の描出が可能で既存の診断法を凌駕しうる事が判明した。

9) 脂肪腫とくも膜嚢胞を合併した  
胸髄腫瘍の1例

広瀬 敏士・石井 久雅 (福井医科大学)  
河野 寛一・久保田紀彦 (脳神経外科)  
林 実

35才の女性。昭和51年頃より左足尖部にしびれ感出現し徐々に上行し鼠径部に至り、同時に左下肢の筋力低下と歩行障害が進行した。昭和60年頃より右足尖部にしびれ感が出現し入院した。神経学的には左下肢の筋力低下と知覚障害および右足指の知覚鈍麻を認めた。左下肢で腱反射亢進、病的反射陽性であった。ミエロCTで

はTh7~9レベルで右側のくも膜下腔の拡大と脊髄の左への偏位、および左後方にmass lesionを認めた。MRIではSR法にて脊髄後方のmass lesionはhigh intensityを示し、右側にはlow intensityを示す腔をみとめた。脊髄動脈撮影では明らかな異常血管を認めなかった。Th7~8のlaminectomyを施行、脊椎管の大半を占める交通性くも膜嚢胞が脊髄を左側に圧排していた。萎縮した脊髄の左後方には細長くのびた脂肪腫がみられ、硬膜外にも伸展していた。くも膜嚢胞を開放し、術後神経症状は軽度改善された。

10) 脊髄硬膜外脂肪腫の1手術例

小林 紳一・鈴木 洋一 (岩手県立中央病院)  
長嶺 義秀・樋口 紘 (脳神経センター)  
脳神経外科

症例は22歳男性。著明な肥満を認めるが既往歴に特記すべきものはない。昭和61年1月、左膝部痛と両下肢の知覚低下にて発症。2月よりしばしば転倒するようになり、11月5日独歩不能となり来院した。入院時所見では、不全対麻痺とTh7以下の全知覚低下、両下肢腱反射亢進を認めた。病的反射は認めなかった。ミエログラフィーでは、Th6で完全ブロックを示し、CTではTh5を中心に胸髄背側のほぼ全長にわたる最大8mmの厚さの低吸収域を認め、そのHounsfield値は-80前後であった。メトリザマイドCTでは、Th2-9で脊髄の圧排を認め、とくにTh5-6において著明であった。なお臀部にdermal sinusと思われるdimpleを認めた。以上により胸髄硬膜外脂肪腫の診断のもとに手術施行した。椎弓切除はTh4-8とし、硬膜外の脂肪組織を摘出した。病理組織学的には脂肪腫であった。術後、知覚低下は徐々に改善し、約1か月後に歩行可能となり退院した。しかし62年3月17日、再び歩行困難を訴えて入院した。

本例の手術における問題点等につき検討する。

11) 腫瘍性並びに血管性由来による  
三叉神経痛を呈した1症例

小穴 勝麿・杉山 浩隆 (八戸赤十字病院)  
脳神経外科  
金谷 春之 (岩手医科大学)  
脳神経外科

1967年Jannettが三叉神経痛患者に対してMVDすなわち後頭蓋窩神経血管減圧術を施行し著効を収めて以来、本邦においてもここ数年来、本手術が盛んに施行されている。さて三叉神経痛にはいわゆる特発性と呼ばれMVDの対象となるものと、症候性といわれ脳腫瘍